

《座談会》

大学の一般教育



文学部教授 中 桐 大 有
女子大学教授 高 山 修
法学部教授 八 木 鉄 男
立命館大学教授 薬師川 虹 一
商学部教授 宮 井 敏
(司 会)

宮井 それでは始めさせていただきます。大学における一般教育のあり方について昨今いろいろ議論がなされており、同志社時報でも、21号、24号などで特集としてとり上げられたり、「人間形成」という点では2号で座談会の記事がのっていたりしているわけです。

そこで今月はそうした問題の一応の締めくくりというか、一般教育問題全体の展望というか、そういったことについて、ひとつ縦横にお話し合いをお願いしようとおもって、お集まりいただいたわけです。

それで、まあ一番常識的な議論のすめ方として、大学における一般教育の理念とは何

か、というところあたりから始めてはいいかかと思っております。

一般教育の理念は

何であるかということ

薬師川 一つ私ね、「理念」の問題でいつも気になることがあるのです。今お話し21号の特集記事ですね。その5頁に永田一郎先生の「同志社大学における一般教育の現状とその問題点」という論説がのっております。立命館のほうでも、当時、大へん参考にさせていただきました。そこらに、「一般教育が人間形成を目的と

するからには」とあります。問題はこれなんです。一般教育というところに「人間形成」とか「全人教育」という言葉が反射的に出て来ますね。すると、それじゃ専門教育というものとは人間形成を目的としないのか、という疑問がその裏返しとしてすぐ出て来ると思うのです。

宮井 たしかに一般教育の議論の場合「人間形成」という言葉が比較的無神経に、お題目のように使われる傾向はありますね。
八木 それ自体、言葉としてはいいわけなんですけれども。

薬師川 今の大学の四年間の教育というもの

は、言うならば全部が一般教育みたいなものだということから言えば、「全人教育」とか「人間形成」ということばが、一般教育を推進させるためのモットーにならないで、逆に押えつけるような作用を果して来たのではないかという気がするんです。その点、一般教育と人間形成というくされ縁のようなものを、ここから整理する必要があるんじゃないかと思いますが……。

高山 大学全体の教育の中で「全人教育」が行なわれなければならないわけですね。

薬師川 そうなんです。そうでないと、「人間形成」のほうは一般教育の専売特許で、専門教育のほうはそっぽをむく、ということになりかねない。

高山 ところが、実際には、えてして専門教育科目担当者の間には、単なる専門的知識とか、技術の伝達にしか関心を示さない人が多い。そうした知識や技術が人間社会においてどういう意味をもつのか、ということに対する認識が浅いんですね。

宮井 誤れるアカデミズムと申しますか。大学では「教育的」であることを軽視する傾向がありますからね。

高山 全教員が人間教育に対してはつきりとした責任を感じるようではなくてはね。

薬師川 そう。

高山 どうなんでしょう。歴史的に見まして新制大学発足当時に、この新しい教育制度の理念について、当時の先生方がどのような認識をされていたか。

薬師川 そりゃ当時はいろいろ議論があったのでしょ。記録を見ますとね。だけど理念そのものについてはかなりあいまいなままですと来た。

中桐 それはたしかにそうだったでしょうね。新しい教育経験ですから、それがどういうものであるか知ろうとはしていた。一部の方はある程度明確につかんでいられたと思います。だけど一般には暗中模索であつた。そこへGHQの教育顧問団が来たりして一種の啓蒙的な指導を各地で行なった。それでそういうところへ出席した人々が、今日ではもうこの分野の古典になっていますけれども、大学基準協会から、「大学の一般教育」という三巻本の書物を出しまして、各科目のカリキュラムのサンプルを作るといふような作業がばつばつ始まって来たわけです。けれども一

般には、一般教育の理念もはっきりしないままに、とにかく発足した制度を消化するだけで精一杯だったのじゃないかと思っています。

宮井 すると制度がスタートして、現実には講義が開始され、大分たつてからこれではいかんかという反省がなされて、どこで理念は一体何やったかいなかと考えはじめたというわけですか。

中桐 そうですね。ところがね、いつの時点であつたかはつきり記憶にないのですが、おもしろいことには「一般教育は専門課程のイントロダクションではないんだ」ということだけはかなり早くから言われていたんですね。

宮井 単なる入門期指導ではないというわけですね。

中桐 そう、はじめからそれ自体の固有の目的をもつものだとしていたのです。

薬師川 それならそれで、では一体「一般教育」とはそもそも何か、「その理念はどうあらねばならないか」ということを、もう少し具体的に討論をすべきだったとおもふんです。

中桐 「人間形成」という言葉ですね。これが使われ出したのは実はここ六、七年以来の



中 桐 教 授

ことだと記憶していますが、何もこの言葉がわるいのじゃないんだな。

薬師川 そうです。

中 桐 問題はこの言葉が何を意味しているかという分析がたりないことです。非常に直感的な使い方をしているとおもつ。

薬師川 「人間形成」というキャッチ・フレーズが一種の呪文のような形で横行しているために、緻密な分析がはばまれているとおもう。何とかしてこの呪文を打ち破らなければ……。

八 木 それはね、逆に言うところ言ったきわめて抽象的な表現でしか言い現わされ得ないような実体しかないとも言えるわけですよ。他に持ってくるものがないんですよ。

宮 井 だから歴史的に見ましても、新しい

教育制度をいわば押しつけられて、何とかそれを消化しようとしているうちにだんだんと矛盾が露呈して来て、そこから反省が生まれ、一体理念は本来どうあらねばならなかったのかということになって、適当な言葉がないままに、「人間形成」これだ、これにしようということになって無批判にとびついた。まあこういう感じがするわけです。

そうすると、この「人間形成」というキャッチ・フレーズが生まれたこと自体が一種の弥縫策であって、少しも根本的な解決にならなかったのじゃないかと思うんです。だから「人間形成」という一般教育の理念のアイマイさ、呪文性、分析を経ないことの杜撰さ、というものを何とかしなければならぬといえれば、それは「人間形成」という言葉の中にその解決を見つけようとしても駄目なんで、むしろこの言葉が生まれて来た経過をふまえて、キャッチ・フレーズ誕生以前の時点にまで立ち返って考え直してみる必要があるんじゃないでしょうか。

薬師川 私もそう思います。だから「人間形成」とか「全人教育」というのは、何も一般教育だけのものではなくて、何と言いますか、

そもそも高等教育全体の目標とか意義としてとらえるべきでしょう。

八 木 それは確かにその通りでしょう。ただもう少し具体的に考えて、では一般教育内部で「人間形成」ということをもう少し内容的に検討するといえれば、それはさきほど話に出ましたように、単なる専門各科目に対するイントロダクションではなくて、むしろ、一般的な広い視野に立って、これから自分が専攻しようとする専門の学問が全体とどういうかわり合いをもっているかという位置づけですね。或は自分と学問とのかかわり合い、それを通じての自分と社会のかかわり合い、といったことが非常に大切なことじゃないのでしょうか。

宮 井 そうですね。たしかに「人間形成」というのは一般とか専門とかにかかわらず大学の全体の教育の目標であり、いや、それどころか、そもそも高等教育全体の目標であるのだけれども、具体的な状況に即して言えば、以上のことにかかわらず、専門科目というのは職業教育としての側面も含めて、より専門的に分化した教育であり、一般教育科目というのは、やはり、くらべて言えば、より「人間

形成」的な側面があることには否定出来ないとおもいます。ただ現実の教育の現場では、両方からの相互滲透がありますから、その境目はそれほどはっきりしたものではないかも知れませんが。

薬師川 そうですね。そうすると組織・制度の問題が出て来ますね。

一般教育の制度は

これでよいのかということ

宮井 つまりね、一般教育の理念として掲げられている「人間形成」という言葉自体もいささかあいまいで抽象的にすぎる。また、現実にもその理念に対する専門科目との責任分担もはっきりしない。となると、現行の一般教育の制度がそうしたはなはだ守られにくい一般教育を遂行してゆくのに適当な制度であるのかどうか。

薬師川 責任体制の問題ですね。

宮井 そうです。わかりやすく言えば、旧制の高等学校ですね。あの制度はそれ自身固有の目的をもってはいるが完成教育ではない。「一般教養」を目的とした大学の予備校なんです。にもかかわらずそれぞれ完全に独立

した学校単位になっている。

もともとね。毎年行なわれます例の日本寮歌祭にみられますような、一種の精神的音痴といえますか、弊衣破帽に名を借りた歪んだ虚栄心、誇張された友情、そこから生まれて来る排他的な特権意識、こりゃ大いに問題があるとおもいます。

けれどもね。いわゆる「教養課程」のようにはなはだ守られにくい、ある意味で力関係に対して非常に弱い教育というものはね、こうした独立の学校制度の中でしか行ない得ないのじゃないかとおもいますよ。

高山 その点ですがね。ここにおられる薬師川先生と私が、大学の一般教育を受講したおそらく最初の学生じゃないかとおもいますよ。それでね。当時のやり方としては「教



薬師川教授

養学部」というものに二年間ゆきまして、その間にいろいろ考えて、二年生のおわりにそれぞれ自分の専攻を決めて各学部の三年生へ進学したわけです。あのやり方もある意味で非常によかったのじゃないかとおもいます。が、どうしてもあれが廃止になったんですか。

中桐 あれはですね、文部省の方で教養学部というのは東大の駒場にしか認めなかったんです。今はほかにも二、三ありますけどね。それで当局から横槍が入ったのが一つの原因です。

もう一つの原因は、教養部の二年を修了して各学部の三年へ進学する場合、学部によって非常な片寄りを生じて来るわけです。経済学部なら経済学部にとやどと集まってしまう。それでそうした片寄りをなくするような適当な技術的工夫が、そのころ考えられなかったというようなこともあります。そりゃ考えたら何か適当なやり方があったでしょうがね。

薬師川 あの時とは別にテストをしてよりわけようなことはしなかったとおもいますが。

中桐 ほとんど希望通りに進学したとおもいます。

宮井 それがね、やりようはあったとおもうのです。例えば甲南大学が一部では現在二年生までは専攻を決めないというやり方をしてる。だから、本当に教養部制がすぐれた制度だという確信があれば、あくまでもそれを守り抜くという決意があり得たとおもふんです。

薬師川 なるほど。

宮井 それで制度の話が出たついでにお話を続けたいと思いますが、例えば今の縦割り、横割りの問題でも、何か基本的な矛盾をはじめから孕んでいるような気がします。

われわれの周囲の例をあげてみますと、完全縦割りといわれる立命館と、完全横割りの京大を両極において、同志社と関西学院がそれぞれ不完全な縦割りと、不完全な横割り制になっているとおもいます。ところがそのいずれもが現行のやり方に必ずしも満足していないで、何か別のやり方に変ろうとする動きが潜在している。つまり横割りのところは縦割りにしたいというし、縦割りの学校は横割りがよいという。

それぞれの学校が歴史的な成立事情や、学内の力関係などから収まるべきところに収ま



高山教授

っているにもかかわらず、なお何か別のものへと動く欲望があるということではすなわ、僕はそもそもこの制度の根本に何か大きな矛盾があるからではなからうかとおもふんですよ。

高山 私もそう思いますね。

宮井 十五年もたっているんな学校がかなり熱心に模索してですね、落着かざるを得ないところに落ち着きながら、なおかつ不満である。何かを探しとるというのは、逆に振り返ったら、どこかおかしい、ということではないか。

薬師川 そういうことなんですね。

高山 制度の輸入の仕方ですよ、問題は。よかれあしかれアメリカの大学では学部というのは教員の組織である。だからその上に立つ

てメイジャー・ワールドとか、ゼネラル・エデュケーションということが比較的スムーズに成り立ち得るわけなんだ。ところがそうしたシステムから一般教育制度だけをいわば抜粋して教員・学生の組織である日本の学部制度の上にのせてみてもうまくゆくはずはないのですよ。

宮井 なるほど。

高山 だからその意味では、徹底的にはじめから考え直すぐらいの根本的な改革をしないと問題はいつまでも残るんじゃないですか。八木 たしかに今の一般教育のあり方に大きな矛盾と欠陥があることは事実でしょうね。

だからこそ議論がとりわけ最近やかましいわけ、そうでなければ発足して二十年もたつてこんなに根本的なところまで問題になるはずはない。

宮井 そうですね。

八木 ですが何と言いますか、新制大学発足当時に、先生方の頭の切り替えがほとんどなくて「課目の編成が少し変った」といったぐらいの意識で、つまり旧制大学と少しも変わらない意識で処理しようとしたのではないのでしょうか。だから専門科目担当者と一般教



宮井教授

育科目担当者の間にはじめからある微妙なズレがあって、だんだんとそれが拡大して来て、一種の身分格差のようなものが生れて来て、今度はそのことだけを部分的に解消しようとするものだからますます話が複雑になつて来たような気がします。

宮井 重要な指摘ですね。

八木 ですから一般教育問題の隘路の一つは理念や制度の問題もちろんありましようけれども、一つには今言つた学内の現実の人間関係の調整がうまく行かなかつたということがあるのではないでしょうか。

宮井 人間関係や身分、所属、格差などといった人事一般が現実には動かしがたい強力な因子になりますから、本来あるべき制度も、担当者の確保、安定ということから大きくゆ

がんでしまつたわけですね。

薬師川 だから立命館のように、いわゆる完全縦割りにしてしまいますと、インター・ファカルティの教育を目指す一般教育などは非常にやりにくいわけです。そこで一般教育のことを主体的に考える機関が必要になつて来る。それも、研究所のようなものから一歩進めて一応独立の機構のようなものが結局は要るんやないかとおもいます。そうでないと、せつかく理念を確立したとしても、現実に実行に移されんわけです。

一般教育をとりまく

現実はどうであるかということ

宮井 一般教育の存立基盤をおびやかすものの一つに、一般の認識不足が考えられます。

とうとうたる世相というか、オーバーに言えば時代精神というか、非常に直接的な効用意識がつよいんですね。目に見えてすぐ役に立つもの、そのみが大事だというわけです。

薬師川 だけど同志社の一般教育研究会でやりになった例のアンケートですね。同志社時報の24号に出ています、あれを見ると受講者である学生の側の考え方では必ずしもそ

うではないようですが。

宮井 そうです。これは時報の21号のほうにも書いておきましたんですが、学生の側には案外素朴な教養主義が残っておるんです。もちろん効用意識のつよい層もあるわけですが、問題は、学内にも学外にも「一般教育だつて？ あんなもの面白くないよ。学生が面白がつて聞いている筈はない」というふうに一方向的に頑固に思い込んでいるところに大きな認識のズレがあるわけです。

高山 けっきょく頭の切り替えが完全に出来とらんということです。中世的なエリート教育から民主主義社会を前提にした市民教育へという転換がすでに制度上なされて、だいぶ年月も立っているのに理解がゆきわたっていない。民主主義、民主主義と言いながら本当に自分たちの世の中を自分たちの判断で決めてゆくんだというような意識がきわめてひどい。だから、いくら大学で一般教育、人間形成、広い視野に立つた総合的判斷の養成なんて言つたつて、大学卒業生をうけ入れる社会のほうで、単なるスペシャリスト、奴隸的に働く人間しか要求しないと、そこに大きなくいちがあるわけです。

薬師川 なるほど。

高山 もし奴隷的に働く中級技術者ばかりがほしいのなら「工業高専」のようなものばかりにすればよい。

宮井 いわゆる社会的要求 *Social needs* と大学の対応の仕方の問題ですね。

高山 そうです。だから場合によっては大学が社会的要求に対応しない。つまり社会に対するレジスタンスがあってもよいのじゃないか。大学というものは、本来そういう意味では直接に役に立たない人間を作りあげるんだという誇りを持ってよいと思う。

宮井 たしかに「産学共同路線」をふくめて「社会的要求」という名前の外的圧力に簡単に降参してしまったり、「無媒介に」うけ入れたりする傾向は多分にあるわけですね。

薬師川 これはたしかに大きな問題ですね。社会が大学に対して求めている人間と、大学が作り出そうとしている人間とのズレが大きすぎるんです。

高山 そうなるとね、その場合の判断の基準というものが必要になって来る。つまり、高等教育全体をつらぬく統一した教育観というものがあるね。

宮井 T・S・エリオットという人の言葉に

「教育の理念はどのみち、宗教かイデオロギーク、そのどちらかに求めるしかないのだ」という意味のことを言っています。無宗教で脱イデオロギー的な教育はあり得ないのだというわけです。そこまで極端でなくとも日本の場合、「市民教育」というだけでは、教育観の立て方が非常に曖昧になりやすいことは事実でしょうね。

薬師川 いま高山先生がそこにお持ちですけれどもその *General Education in a Free Society* という本ですね。その本の中に書いてあるんですけども、欧米の場合はですね、やはり西欧の伝統を継承して、それをさらに再創造して発展させてゆくということが、教育の基調としてあるわけなんです。その点、同志社の場合は、キリスト教というものがあって、それを土台にしてやっていく、何か問題のある時はそこへ帰ってゆくということがあるんじゃないですか。

宮井 たてまえではね。

高山 たてまえだけじゃなく、実際にあると思います。

薬師川 日本の場合はね、一般的には、よき

市民の養成ということが漠然^{ぼんぼん}としてあるんですが、明確なよりどころというものはつきりしない。おまけに、頼りとなるはずの伝統が、意識の断絶もあって非常に稀薄になっている。だから「人間形成」から「国民教育」へとキャッチ・フレーズを替えたとしても、進歩的な学者から保守的な政治家に至るまでが、うしろにいろいろな雑念をひかえた上での「国民教育」ですから非常に幅があるわけです。終戦前であれば、よかれあしかれ、権威を中心に秩序がありえたわけですから、ともかくも一つにまとまった線があったでしょうけれども。

具体的にどのような

工夫がなされているか

高山 アメリカの場合、一般教育の一つのコアになっているのに、フレッシュマン・イングリッシュという国語教育があります。思考の根底には言葉がある。したがって思考の訓練には「読ませる」「書かせる」ということが要るんだという考え方に立っているわけです。

宮井 なるほど。

高山 思考を展開してゆく、これは民主主義的人間の基礎的訓練として大事なことでおもうんですが、何か国語教育とか、場合によっては作文教育もふくめて、一般教育としてやっておられるところはないんですか。

中桐 作文をやらせて、ただ文章を書かせるだけじゃないに、論理学をかみ合せてやっておられる人はありますね。数少ないですけども。

高山 これは非常にたくさんさんの教官が要りますし、ぜいたくなことなんですけれども、よい教育というものは金がかかるんです。

薬師川 今おっしゃったようなことが現実には不十分な形で外国語の教師にまかされているのが現状ですからね。

宮井 たしかに表現力と思考力をむすびつけた訓練ですね。これはおっしゃる通り当然あるべき科目なんです。けれどもこの点については、言うならば後期中等教育、つまり高校の低学年から本来始まるべきものでしょうね。

高山 ハーバード・リポートによると一般教育の問題に関しては、やはり高等学校の教育を非常に重視していますね。高校との連繫が

大事でしょう。

宮井 ものを考えさせる訓練という意味では私も商学部で数年前からやっている一般演習というのもその一つになりましょかね。

高山 それはどういふのですか。

宮井 レポートを書かせても「論旨がまとまってない。発表させても何が言いたいのかわからん」というような声が従来からあり、何とかしなけりゃならないことが一方にあって、また別の要求として、クラス制設置の問題、これは従来やっておりましたプロゼミの発展的解消ということとむすびつきまして一種のホーム・ルーム制のようなものをつくったわけです。

これが他の学部とちがうところは卒業必要単位であるということなんです。が、ともかく、いろいろな書物をよませて、それについてレポートを書かせる、というやり方をしえられる先生方が多いようです。

薬師川 これは基礎教育科目とは発想がちがいますね。

宮井 よく似ているかも知れませんが、ちがいます。基礎教育科目の場合はやっぱり専門科目担当者の効用意識があるとおもっています。





八 木 教 授

よ。そうなることやほり一定の範囲内での限定ということが出て来ます。四年間という短い期間に一定の水準にまで到達させなければならぬという一種のあせりのようなものはよくわかるのですが、本当に今必要なのは、基礎教育科目よりも、もっと基礎的なものなんでしょうね。

薬師川 立命館ではプロゼミというのがありまして、外国語のクラスを基本にして一年生全部がクラス制をとっているわけです。ただ悩みは、うちの場合、縦割り制をとっているために、学生が専門意識を非常に持つわけです。それで、どうしても基礎科目的になる傾向がありましたね。

中桐 今、レポートとか読書指導ということが出ていますけれども、平たく言えば勉強の

仕方を学ぶといっても良いわけです。私の言い方では Learning of learning というわけです。

大学は教育機関であると同時に研究機関でもあるわけですから、そういうところへ入って来た以上、まずラーニングを学ぶ。もう少し内容的に言えば、そこでは、専門科目のラーニングとは違って、主として総合的なものの見方を学ぶ。そこへ他領域からのものを考へ合せて認識してゆく。そういうことが専門科目との対比において必要なことだとおもいます。

それで、こういったことが観念的にならないで、自分のプラクティスを通して身につけるといった意味からも、演習形式と言いますか、小クラスで先生からの一方交通にならない形のやり方で、読んだものを書かせて文章構成を分析させるとか、資料を集めて結論を出させてみるとかいうようなやり方をしているうちに、学問をするという基本的な姿勢が出て来るものと思います。その上に立って専門の課程にすすんで行けば、まがりなりにも本格的な学問をするのだという線に少しは近づくのではないのでしょうか。

宮井 戦前の場合で云いますと、数が少なかったということもありましようけれども、とりたててそのことを言う必要はなかったのではないのでしょうか。今日それが非常に必要だということとは、学生数の急増とこれにともなう学力の低下から生れて来るのではないか。

中桐 そうそう。

宮井 先年の高校校長会の発表では、現在の高校生の三分の一が、そもそも後期中等教育を受ける適性が根本的にないのだということです。これを信用するとすれば、その三分の一の生徒が大学入試に際して受験技術をフルに使ったり、或は競争率の低いところへもぐり込んで来ていないという保証はない。

八木 それはそうですね。ただ高校の教育のやり方にも問題はあつて、受験技術の養成にあけられて、本来の能力をくみ出してやるような教育が行なわれていないことも考えなきゃなりませんね。

宮井 なるほど。

八木 それから第二語学などは高校からスタートさせてはどうかとの意見もあります。いろいろ技術的な問題はあるでしょうがね。もっとも、語学にかぎらず、高校との連絡、協

調が充分につけば、もっと他の科目でも高校におろして、大学の講義レベルを高めるということも可能でしょうね。

高山 女子大の場合は、学生数が少ないこともありますが、創立当初からリベラル・アーツにかなり重点をおいていると工夫しまして、例の「人間関係」という講座がおかれているわけなんです。

宮井 福原春代先生がやって居られた……。

高山 そう。ここ数年は主題として一種の総合コースのような形で、「大学生活への適応」という大きな前提を立てて、それを四つのサブテーマに区切って、一が「大学教育の目的」二が「新島襄の同志社教育」、三が「人生について」、四が「精神衛生」とわけまして、一つをだいたい三週間づつぐらいかけて、二時間のうち、半分が講義で半分が討論。講義のときは二クラス合併で八十人ぐらい。討論の時はクラスを半分にして二十人ぐらいです。

中桐 先生が大変ですね。

高山 そうです。一人の先生が討論のクラスをいくつも持たねばならないことがあります。それから四年生の後期にしくくりとし

てもう一度このやり方をする。特別講演とかみ合せるとか、いろいろな工夫があるようです。いずれにしても、やっぱり人数の問題ですね。ともかくもこういうやり方が出来るというのは。

宮井 「人間関係」とか「プロゼミ」とか「一般演習」とかいろいろ出ましたけれども、けっきょく、教育というのは手工業なんです。

薬師川 マスプロはきかんわけです。

これらの大学は
どうなっているのか

高山 それなのに、大量生産しようとする。これはどういうことかといえ、戦前の大学はエリート教育であった。エリートというのはまあ言いかえれば指導者ですね。ところが現在

在大学進学率は男子で二〇%をこえている。

都会地ではもっと多いでしょう。要するに五人に一人。そんなにたくさん指導者が要するはずがない。とすればこれは明らかに市民教育



あるゼミクラス（京都御所にて）

化して来たんだと見てよいわけです。

八木 ところが先生方はその切替えについて行けんですよ。一番の基本としては、これ

では駄目だから、もっと厳選して昔のやり方に戻して行った方がよいのか。或は今おっしゃったような一般的な高等教育の方向にさらにすすめて行ったらよいのか。そのどちらが日本の現状にあっているのかという議論がいるわけですね。

それでいま後者の考え方に立てば大学全体が一般教育みたいなものだというさきほどの話が始まります。強くなって来るわけで、専門的な分化は、結局、大学院でということになるのじゃないでしょうか。学部によって大分ちがうでしょうけれど……。

高山 「よき社会の構成員」を養成するという仕事と、依然として「指導者」の育成という仕事と、大学には二重の使命があるとすれば、いづれは分化がすすんで、一般大学と大学院大学というふうに分かれて来るのかも知れませんね。

宮井 ただ先日京大の奥田総長のお話がありましたけれども、京大はゆくゆくは大学院大学にしていくという。そうなると旧帝大以外の国立一期校クラスでは特権的超Aクラス大学の出現を警戒するし、大学院を設置することが学問のレベル・アップのための努力目

標になっている二期校クラスは反対するでしょうね。

八木 大学への進学率が高くなるということは、結果的には国民全体の教育程度が上がるということ、これは非常に結構なことではないかと思えます。けれど、社会の発達につれてますます高度な知識や技術が必要になって来るので、専門科目を大いに充実せねばならぬという方向と、高度に発達した社会に出てゆくののであればこそ、ますます広い視野に立った総合的判断が必要だから、一般教育をもっとしっかりやらせねばならないという方向と、このどちらかが絶対必要なわけですね。そうしますと、つまるところ、今の大学の四年間ではとても無理だということになるのじゃないでしょうか。

中桐 基本的に制度を変えようという動きはあるわけですよ。それがどういう方向を目指してどの程度まで変えようというのかわかりませんけれどね。ともかくも目下検討中らしい。そういう矢先でもありますから、やはり制度を変えようとする場合、現場のわれわれからもあるべき姿を示し、それを考慮に入れてもらうということが必要なんじゃないでし

ようか。大いの場合、制度をいしくって魂が抜けていることが多いですからね。

薬師川 文部省はあったけれども文部哲学はなかったでんすからね。

宮井 ただもう一つの問題は、大学進学者がふえるのはまことに結構だけれども、そうした傾向というものが、いわば野放しになっている点、それでよろしいのかどうかという気がしますね。

まとめ

宮井 それでね、少しはつきりして来たのは、まず、一般教育というものに對する基本的な考え方が未整理で、分析が不充分だということです。

薬師川 そう。「人間形成」とか「全人教育」とかいうキャッチ・フレーズにたよらないで、もういっぺんははじめから考えなおそうということです。

宮井 それから、かりにそうした理念が確立したとしても、大方の認識不足から全体に徹底しないうらみがあるので、大いに啓蒙運動をして、まず、担当者の中に、ついで専門科目担当者に、ついで社会一般に認識をあらた

めさせることが必要ですね。

八木 そうです。

中桐 その上で、そういうふうに白紙に描かれた理念を実現するためには、どのような制度が必要であるかということになります。

宮井 ただここで問題になるのは、その実現をはばむいくつかのネックですね。

薬師川 そうです。第一番目には、一般教育問題などほうっておけ、自分の勉強をしろうという学内の空気です。

高山 これは欧米でも非常に問題になっているらしいですね。その点、論文や著書だけでなく、教育面での業績を教員のメリットとしてもっと高く評価する必要があると思う。

宮井 その点では、立命館など、行政組織以外に研究部門としての一般教育センターが公の機関としておかれているということは、われわれから見ると非常にうらやましいのがね。

中桐 アメリカでも、おそらく他の国でも同じだとおもいますが、大学というところは、リサーチの面がクローズ・アップされて、ティーチングの面がオミットされがちな傾向がやっぱりあるようですね。ですからア

メリカあたりを見ましても、大量の大学進学者をむかえうちましてね、四苦八苦しているでしょう。

それでね、リサーチばかりをメリットにする大学ではもう本当の教育が出来ないというので、社会的にティーチング・プロフェッサーをリサーチング・プロフェッサーと同格に評価するというふうに一般の関心呼び起していかなければ、舞が舞えないという議論がありますね。

宮井 それから、現実の教育行政組織の中には力関係ですね。これを何とかしないことには、いろいろな抵抗を排除して、せっかくすぐれたセオリーに到達しても、それがポリシーに転化していかないとなりませんからね。

八木 受講者である学生の意見を十分に汲みあげるということも忘れてはならないことでしょう。

宮井 そうですね。大量の市民を養成するんですから、官学風アカデミズムで講壇の上にそっくり返っているわけにもいかなのじゃないですか。何も教壇からニュース解説をせよというのじゃないので、多少とも、学生のレ

スポンスを見ながら説得する工夫がいるとおもいます。この点では、人文科学系列や社会科学系列よりも自然科学のほうがすすんでいるようです。自然科学史でも科学概論でも、生物学でもどのように教えるかという点では従来から近畿地区の一般教育協議会などを見ましてもずいぶん議論をされたようです。

薬師川 全部の一般教育の担当者が片手間でなしに、三系列それぞれの科目に専念するようになれば、だいいち自信をもって自己の立場を主張するようになるでしょうし、そこから自主的にカリキュラムも生まれるようになるとおもいます。

宮井 それには教員組織の問題がからんで来ますね。身分、処遇、配属の問題もかなりな隘路になっておりましたよ。

高山 いずれにせよ、多くの大学では、経営の上、どうしても安上がり教育ということが考えられ、その結果、手の抜けるところになるべく手を抜く、あるいは現場の担当者の当然の要求に耳をかさないということになるのだとおもいます。

宮井 それではこの辺で。